

IGF1遺伝子を活用した「おおいた冠地どり」の改良 畜産研究部

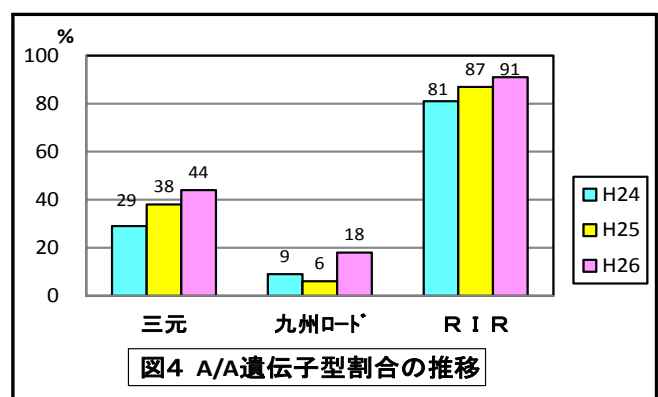
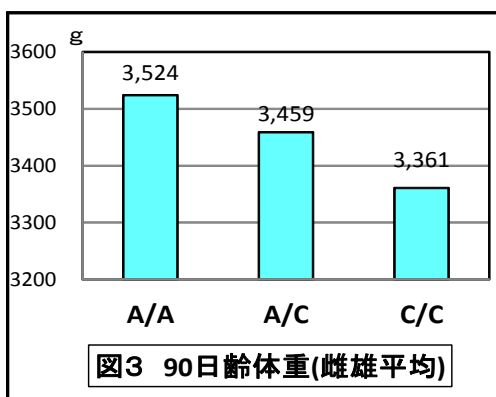
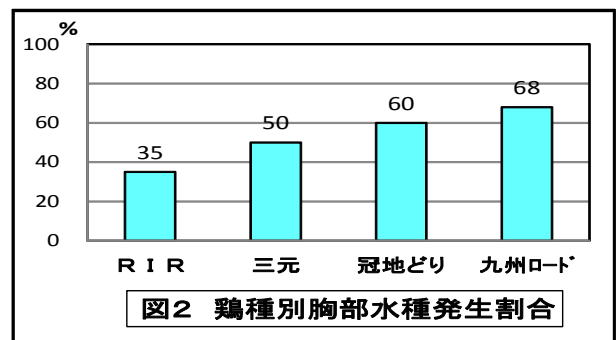
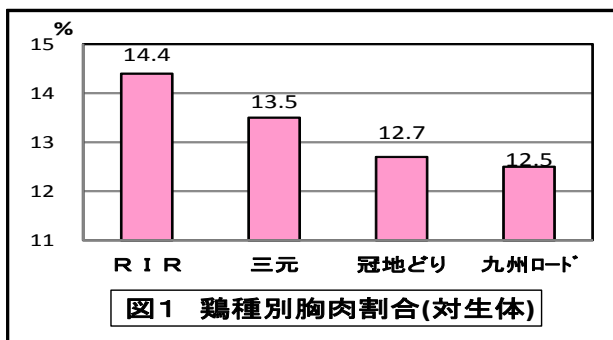
1. 研究の背景

「おおいた冠地どり」の食鳥処理を行う中で、と体の一部に胸部水腫による商品性の低下が課題となっている。その一要因として冠地どりのムネ肉が一般的なブロイラーより小さく、座った時に体重の大部分が胸骨へかかることが原因と考えられる。その改善のためIGF1遺伝子を利用した育種により胸肉を大きく改良することで胸骨への体重負荷を軽減し、胸部水腫の発生低減を図る。併せて胸肉重量の増加により農家所得の向上を図ることが望まれている。

※IGF1は「インスリン様成長因子1」とも言われ、筋肉、骨、肝臓、腎臓、神経、皮膚、肺等の細胞成長を促進する作用がある。これまでの報告では、胸肉重量、ササミ重量に影響する遺伝子型の効果はA/A>A/C>C/Cであるとされる。

2. 普及したい技術のポイント

- ①胸肉割合の高い鶏種は胸部水腫発生割合が低い傾向にある。(図1、図2)
- ②雌雄平均体重はA/A型、A/C型、C/C型の順に大きく、A/A型はC/C型より約5%大きかった。(図3)
- ③冠地どり原種鶏をA/A型に選抜した結果、H26年度種鶏のA/A遺伝子型の割合はH24年度(改良前)と比較して向上した。(図4)



3. 期待される効果

- ・出荷体重の増加と農家所得の向上

4. 担当機関連絡先

畜産研究部 豚・鶏チーム
 TEL: 0974-22-0673
 住所: 豊後大野市三重町赤嶺2328-8